

トリナクリアの回想

オイゲン・ゴットロープ・ヴィンクラー著
松川 弘・訳

Gedenken an Trinakria
von
Eugen Gottlob Winkler

Aus dem Deutschen
von Hiroshi MATSUKAWA

南欧の夏の空は、無色透明以外の何物でもなかった。太陽が日々を疲弊させるあの途方もない陶酔的な明るさは、目にみえる物を、物質のすべての重みや確実さから解き放っていた。事物は、軽やかに、漂うように残り、もはや、たんなる輪郭としてしかとらえられなかった。山々は、透き通った黄色、緑、淡紅色でみたされ、谷筋には、ごく淡い緑が、かすかに認められた。オリーブの幹をかすめるちぢれた小さな影ですら、力強い光にひたされ、対比を欠く透明な董色がかかった薔薇色にみえた。

家々の白い光がまぶしく反射していた。アルカモ¹⁾の丘の背後にうかぶ山は、ほとんど影を投げず、その真上に、太陽が輝いていた。

向こうのしなやかな紡ぎ糸が泡立ちながら遠くに消えていくアーモンドの木の前には、私が出てきた小さな家があった。その家の貧しい農夫が、抗しがたい優雅さで、私を食事に招待したのだ。私は、窓のない涼しい部屋にすわり、家畜や道具にかこまれて食事をとった。農夫は、そこいら中を駆けまわる太った天竺ネズミの一匹を殺した。彼は、あつという間にネズミの後脚をつかんで、他のネズミがキイキイ鳴きながら走り去る間に、頭を壁にぶつけて打ち砕いた。そのネズミは焼かれて、食卓に供された。われわれは、湿ったトウモロコシのパンを、オリーブの酢漬をそえて食べ、ここでとれる甘酸っぱくねっとりしたワインを飲んだ。あとで、農夫は、庭から熟した初物の桃を摘んできて、それを賓客への贈り物として差し出した。彼の大きな、大地と太陽とによってなめされた手のうへの桃は、熱すぎたので、それにふれたとき、私は驚いて尻込みしてしまった。

町の通りは死んだように静かだった。刺すような光だけがあり、その光に、私のまぶたは疲れはてた。アフリカの砂漠から海を渡ってきた風が絶え間なく吹きつけてくるので、暑さはほとんど感じられなかった。私が床につき、そとが静かになった夜でさえ、風の音は、私の耳もとで、う

つろに深々と、洞窟のなかで聞こえるように鳴り響きつづけた。

私は夢見心地で歩きだした。ときおり、とじた目のせまい透き間から、何か具体的な物の断片的な映像が入りこんできた。ひらいたドアの闇のなかの青白い顔、そのうしろのシーツの非現実的な白さ、割れた甕。これらはすべて、筆舌に尽くしがたいほど貧弱で汚れていた。せまい、舗装されていない道路には、もみ殻やしおれた野菜、糞、それに目玉をくりぬかれた魚の頭などが散乱していた。山羊が、うすい影を投げる家の壁に皮膚をこすりつけて、乾いた声で忍び笑いしていた。

私は、もつれた路地を、目的の方向にかりうじてたどることができた。あるときなど、途中ではだかの幼児に出くわしたが、その児は、地べたにすわりこんで、汚物のくさい水を指のあいだからしたたらせて遊んでいた。うわのそらの私が、重い足取りで水たまりに踏みこんで、泥だらけにされると、その児は大声をあげて泣いた。すると、近くの戸口から、ひとりの女が叫びののしりながら走り出てきた。しかし、大あわてで与えた数枚の銅貨が、すぐさま、祝福の洪水にかわって、私に降りそそいだ。その祝福は、次の角を曲がる頃になっても、なお私を追いかけてきて、いつもならとっくに疑っていたであろうこの忌まわしい出来事の現実性を私に思い知らせたのだった。なかば目をとじて私が歩き出したとき、前方では、濃い薔薇色のもやがすべてを包み隠していた。現実には、もつれた思考の網にすぎないようにみえた。風に激しく揺さぶられた、熱い、乾いた空気にかき立てられて、精神は、すばしこい蜘蛛のように、私のなかに網を張って、計り知れないほど重い獲物を待ちうけていた。

広場のまわりに歳市の屋台のように軒を接してならんだ喫茶店のひとつに、私は腰を落ち着けた。どの喫茶店にも日よけがあって、それらは、陽光でみたされた四角を影で縁どり、赤やオレンジ、緑など、さまざまな縞を作って

いた。ただ白だけが、そのどれにも共通した色であった。

色とりどりの宣伝文句をしるした鏡が、ひらいた入口の側面を飾っていた。燕尾服に身をかためた赤ら顔の下品な男が、リキュールをちびちび飲んでおり、豹の皮を身にまとったヘラクレスは、そのほくそ笑みで、最上の者もつある種の悲哀をあらわしていた。私は、こうしたグロテスクな悪趣味の発明品をいつまでもながめて飽きなかった。うすら明るい涼しい室内の背後に、カウンターがあって、ニッケルでメッキしたコーヒーメーカーの化け物が置いてあった。それは、生き物のように、シューシュー音を立てながら、黒い飲み物を吐き出していた。さらに背後では、壁際にならんだ瓶が輝いていた。その瓶にはまがい物という点で互いに他をしるぐ珍しい蒸留液が入っていて、客は、はじめはいいや、しかし次第に熱心にそれを飲むのだった。

入口に垂れさがったゆるい連真珠のすだれを通して、私はこれらをみた。真珠は、色の配置によって、まわりを鳥が飛びめぐる薔薇の花束を形作っていた。誰かが、指でふれずに、頭をつきだしてすだれをくぐり、入ってくるたびに、その花束は完全にくずれてしまうのだった。連真珠は、肩のところで、カチャカチャ音を立てて容易にわかれ、薔薇の花束がもとおりになるまでには、かなりの間があった。

白とオレンジの縞がはいった日よけの下で、私はコーラを飲んだ。私が顔を向けている広場のせまい方の側に、シチリアの小さな田舎町でよくみられる落魄した聖堂が立っていた。それはなかばノルマン的、なかばバロック的で、人口のわりには大きかった。だが、その見すばらしさにもかかわらず、輪郭の何らかの特徴、おそらくは鐘楼、あるいは正面との何らかの調和が、つねにすくなからぬ美点を聖堂に与えていた。

私のまわりのテーブルには、くだらない、いささかべとついた優雅さを身につけた、田舎町の若い衆がぶらついていて、着飾ったサーカスの猿を連想させた。彼らは、路地や家々のごみ、あらゆる風景のうちでもっとも現実的なものに取りまかれた広場で、一日中、こっそり猥談を交わし、女性に接することができないので、ちょっとした悪事に没頭するのだった。鑄鉄のガリバルディ記念碑の前でファシストの楽隊が演奏をはじめ、夜おそくになってようやく、娘たちは、油断なくあたりに視線をはしらせる品のいい老婦人に付き添われて、一時間ばかり、通りに繰り出した。ときには、女房が若い衆のひとりと不貞をはたらくようなことも起こるが、そんなときは、ドラマがこの小さい町を興奮させ、現実の生活の一部が、この幻想の世界にもちこまれるのである。しかし、家族の扶養者が死んだり、親類の仲介で若者が身をかためたりすると、たいてい、青春は

自然な結末をむかえることになる。それから、彼には俗物の生活がはじまり、彼は、商用で地方まわりをしたり、穀物や羊、ワインや油をあきなうようになる。

たとえ、未知の現実に刺激されて、私の前でうれしげにお芝居し練り歩いてはいても、こうした若者の顔には、ふと暗い絶望の影がかすめる。ひとりとして、健全に育ったものはいない。この数千年間シチリアに住んだ数多くの種族のうちで、最下等のものが生き残ったように思われる。これらの人々のいずれにも、ゆがめられたもの、誇張されたものが認められる。ある者は、犬の頭のようにそり返った額をもち、またある者は、奇形の額をしている。鼻が異様に曲がっていたり、四肢が短すぎたり長すぎたりする。ギリシアは、ここではその痕跡すらとどめていない。

若者たちは、馬や、近々おこなわれることになっている聖マリア祭の行進についておしゃべりしていた。この祭は、暦にのっている通常の祝祭ではなくて、シチリアだけで特殊な動機からもよおされる数多くの聖者祭のうちのひとつであった。それには、たいてい、きわめて特殊な形式でおこなわれる行進が付随していた。私は、大昔アフリカからやってきた黒人の聖者を祭る行進を覚えている。ちぢれた巻き髪の手をして、きらめくマントで身をつつんだ彼の像が、家々を見おろすけわしい山上の礼拝堂に安置されていた。昔、泥棒が夜のあいだに顕示台をぬすんだとき、黒いフィリップの像に命がやどって、駆け足で泥棒のあとを追ひ、その高価な器を彼からうばい返したという言い伝えがあった。この追跡は、それから毎年繰り返されることになった。聖者の等身大以上の像がさおにつるされ屈強な男たちの肩にかつがれて、かつて像が泥棒に追いついたといわれる場所まで、山上を駆け足で運ばれた。急に巻き起こった風に、幅広のマントが、二枚の巨大な黄金の翼のようにはためいた。教区民全員が、叫び声をあげ、祈りを唱えながら、そのあとを追いかけて、もうもうたるほこりをかき立てた。老司祭が、苦しげに息をしながら、行進の速度をおさえようとしたがむだだった。彼は、途中で、燃えるように赤い上着を着てわめきながら疾走する少年聖歌隊員たちに置き去りにされてしまった。彼のために楽しみをあきらめようとするものは誰もいなかった。一番先に、アイスクリーム売りたちが走っていたが、彼らも、聖者の像を飾りつけた車が下り坂をひとりだけで走り出すのを引きとめることはできなかった。ひとりのてんかん病みが、地面にたおれ、泡を吹きながら塵のなかを転げまわっていた。誰も、彼にかまわなかった。かつて泥棒が捕らえられたはるか彼方の場所からは、すでに屋台や旗のぼりが手招きしていた。ときおり、像のかつぎ手たちが転んだり像がひっくり返るような音が聞こえてきた。

私は、もう二、三杯リキュールを飲み、いたんだ木製の

植木鉢に植えてあるいじけたシュロをもの憂げにみつめた。このあわれな場所には、注目にあたいる何物も認められなかった。風化し、腐朽した聖堂のファサードには、移りゆくときが、はかなさのしるしを刻み込んでいるように思われた。私が目を向けるたびに、それはますます暗く、もろいものにみえてきた。飾縁からは、草が垂れさがっていた。その草は、人目につかずたまった塵から養分を得ていたが、強い日ざしにすっかりひからびてしまっていた。うすい影が、時計の円盤のうえをかすめて、静かにときを示していた。それから再び、すだれの薔薇の花束が、綿を入れた肩によって乱され、音を立てた。だが、しばらくすると、その乱れはまたしても無事にもとにもどった。私は、この無意味な荒廃のあいだに横たわる秒を数えはじめた。すだれがふたたびもとに戻るのに何秒必要か、数えたわけだ。生から無限にへだたっているという感情が、私をとらえた。おそらく、燕尾服を着た子豚がリキュールをちびちび飲んでいるといった方が、正鵠を射ていた。

闇の奥では、自動ピアノが演奏していた。ピアノは、おそるべき正確さで、時間を音に切り刻みはじめた。音は、部屋の壁にあたって、二倍、三倍に反響した。まるで、空間と空気が粉碎されたような感じがした。旋律が絶えたとき、無限の寂莫以外には何も残っていないように思われた。これに続く静寂は、もはや耐えがたかった。みせかけの月や、しみ通るような少女の香り、べとべと、ぴちゃぴちゃした接吻を想起させる、センチメンタルな曲の調べに心ひかれて、若者たちはおしゃべりをやめていた。この小さな世界は、すっかり死んでしまっていた。奇跡が起こりでもしないかぎり、それがよみがえることはありえなかった。

だが、その奇跡が起こることもあった。想像もつかない長い年月をへて、奇跡は、敷石をカチカチと鳴らした。金褐色のきらめく毛をした裸馬が、あたかも今作り出されたばかりのような力強さと新鮮さに輝きながら、広場を軽やかな駆け足で疾走した。やっとのことで手綱をにぎった半裸の若い下僕が、息を切らせながらそのあとを徒歩で追っていた。彼は馬に何か呼びかけていたが、馬はすぐにはとまらなかった。自己の充実に増長し、頭をもたげて人気のない広場を一周したその馬は、空間をはじけるような生気でみたした。それから、若者たちに取りかこまれて、馬は私のすぐそばに立ちどまった。しかし、実際には一時停止しただけで、動き自体は休止していなかった。動きは、波のようにたえまなく、馬の体を通りぬけていた。黄金色の泡のように、たてがみと尾がはためき、小躍りする前脚の関節頭では、光輝くメダルがグルグルまわっていた。

若者たちは、馬をなで、行進についておしゃべりしていた。その馬は、最初、聖徒旗とともに行列の先頭に立つことになっており、そのために、遠隔の地から連れてこれ

たものであった。私は、行進のイメージを、眼前にはっきりと思いうかべることができた。旗や喧騒、空疎でわざとらしい人々の幻影を。そして、外見は敬虔だが、みせかけだけのいつわりの感情の産物である、彼らの用意したつまらぬページェントが、この真実そのものの所産によって、輝かしい現実に変容するさまも想像することができた。馬の縦隊が、行進の先頭をいくことになっていた。私は、馬たちの内部の生命が、神的なものにきわめて近いことを知っていた。ここでは、形姿がなおも純粹に伝えられており、あらゆる部位がそれ独自の存在の充実ぶりを示していた。私の眼前で、馬のそり返った首が力強くあがった。上のラインはまっすぐで、ほとんど垂直に近かったが、下のラインは、白鳥の首のように優しく曲がって胸につづいていた。空虚さやもろさはどこにも認められなかった。すべてが、生氣として形にはたらきかけ、姿に意味を付与する、隠された力にみだされていた。

私は、ひどく落ちつけぬ夜をすごした。せまい宿屋の一階の部屋に泊まっていた私は、暑いので、ガラス戸を開けっぱなしにしておいたのだが、夜の冷気はすこしも感じられなかった。部屋には、屋外に開く窓がなく、ガラス張りの中庭に通じているこの戸からしか光は差し込んでこなかった。ガラス屋根の窓が引きあげられてはいたが、せまい空間にはまだ昼間の熱気がたぎっていた。宿のもちぬしは、その中庭で、熱帯の珍奇な植物を栽培しており、蔓が木造のバルコニーのところまで伸び出していた。そのいくつかは、花を咲かせ、甘ったるい腐ったような香りをはなっていた。夜に幾度も、せまい通路をぶらついてみたが、地面の落葉のなかでは、色あせた花が微光をはなち、暗闇を螢が飛びかっていた。頭上には、ガラスによって無限にへだてられた明るい星空が輝いていた。

朝一番に、私は宿を立ち、自分をセジェスタ²⁾の近くまで連れていってくれるはずの車に乗り込んだ。シチリアの南西端、カステランマレ湾³⁾を眼下にみる丘のうえに、まるでいやらしいレブラのようにへばりついているアルカモの最後の家並みをあとにするやいなや、未知の愛すべき風景が、ふたたび私を取りかこんだ。この風景はわびしく、そのさびしさは、荒涼にまでいたることもありうるが、決して原始的なものとはいえず、人間を墮落させ破滅させる体のもではなかった。この風景はどんなに大きくても節度をもっており、人間に合うように自然に規定されていて、その力強さと新鮮さを無傷のままでもち、人間の最初の足跡をなお期待しているかのように、母性的な広がりを見せていた。

大気は涼しかった。風はまだ起こっていなかった。陽光はまだやわらかく感じられ、それがふれた大地を、南国のかわいた不透明な色にかえていた。穀物は黄ばんだ青銅色

に、オリーブの木はくすんだ緑に、かん木やポプラは濃い緑色にかわっていた。丘の斜面の幾重にもからみあった急坂を通過して車は谷へ向かった。陶酔的な揺れが、そり返った四肢、踊り、揺れる花環を想起させた。それから、せまい谷が車を迎え入れたが、その谷は、さらにゆるやかに上方に通じていた。道は黒い大木が斜面をおおう日陰の側についていた。眼下にはビワの木が生えていたが、もうこのときには実が熟していた。かほそい枝が、赤みがかった黄色い果実の重みで地面すれすれにまでたわんでいた。

谷の反対側のアシにおおわれた川の上、切り立った断崖の上には、朝の太陽が輝いていた。ある強い期待が、私の心をとらえた。より強力な存在感が、突然、ぶどう畑やとうもろこし畑から放射してくるよう思われたのだ。わきおこった風にやさしくふるえるこれらの植物は、より深い意味で、生気をみなぎらせていた。人間がみたりふれたりするだけで、ドリユアス⁴⁾やニンフといった存在を生み出す力を、それらはもっているに違いなかった。月桂樹の木はどれも、再変身したダフネだった。消えてなくなるものは何ひとつなかった。すべてが、より力強く明確な形をとって、身近にあった。燃えるような穀物の立ち並ぶ穂、やわらかい緑色のさやを弾き飛ばして、茎を力強く貫通する管から突き出したこの穂が一体何を意味しているのか、今はじめてわかったような気がした。それは確かに存在していた！ 私は、車の走行中に垂れた枝からもぎとった果実のひとつをむいた。未来の生を無限に含有する三つの冷えた種のまわりに、熟し切った果肉がかたまっていた。それは、絶大な権限で解釈を求めていた。もし必要とあれば、神的なものを再度作り出すことも辞さないかのように。

期待と希望が、ほとんど現実の翼をふるわせて、朝の谷の気味のなさをフワフワ飛んでいった。それが上昇するやわらかな力が、ドアをたたくように、立ちならぶ山々の側壁を打った。長いあいだ期待されていたものがそれらの背後に隠されているに違いなかった。この風景のもつ意味や明確な本質、ここですべての事物からありあまるほどに押しよせてくるものの真の姿が。ついにそれは姿をあらわした。切り立った急斜面のはるかな高みにはじめは誰しもギョッとするような明瞭さで、神殿が、明るい陽光をあびて立っているのがみえた。それは、どんな奔放な希望も楽々と凌駕するものであった。しかし、ほんの一瞬その姿を垣間見させただけで、神殿は、谷の湾曲によって再び視界から消え去った。

その頂きにかつてセジェスタがそびえていたバルバロ山の山麓を大きく迂回して登るために、私は、道が分岐している橋のたもとで乗物をすてた。穀物畑の縁のイトスギが、最後の冷気を与えてくれた。スカマンデル川がうるおす谷の牧歌的な緑をもう一度見下ろして、何十年かすればおそ

らく並木を形作るであろう若木に取りまかれた道が、上方の陰のない空地に通じていた。

ふたたび神殿を認めたとき、衝撃が私の体を走った。その衝撃は、あとで現実に出くわすことになる並みはずれて偉大なものを、感情が異常な緊張で前もって予知するとき生ずる体のものであった。神殿は、生あるもののように存在していた。私に通っていく荒地の周囲のいたる所が、突然、神殿の発するおびただしい生気でみだされた。それは、小高い所に立っていた。近寄っても、その生気は減少することがなかった。神殿は、いかなるなれなれしさも許容しなかった。徐々にそれに対することなど、とてもできない相談だった。それは私を消耗させるか、私にたいしてよそよそしくふるまうに違いない。私は、自分が今まで自分の生に取り込んだすべての力を想起してみたが、それらは、この神殿のもつ力に遠く及ばなかった。私が不安や安寧からかき集めたどんなきびしさ、理性、懐疑も及びはしなかった。かつて無感動にこの腕に抱きかかえた、打ち砕かれて血まみれの死者たちのことを、私は思った。袖から、とがった青白い骨が突き出ていた。自分の腕の上を流れるなま温かい真っ赤な血の匂いを、私はかいだ。また私は、自分の父の死のことを思い起こした。彼が死ぬであろうことは前々からわかっていた。あの当時、私は、奇妙に冷やかな好奇心をもって、死をとらえようとしていた。父は意識がごくはっきりしていて、よく話をした。彼が沈黙したとき、一羽の雀が飛びあがった。自分が今までながめていた鳥はまだ窓敷居にとまっていたので、事態が今や決定的に変化したことを、私は悟った。私は動揺しなかった。それが突然自分の身に起きたらどんなに恐ろしいか予感していたので、私は、すべてを抑制することができた。しかし、それも今度はむだだった。私にできたのは、自分が今までに犯したすべての不正を思い返すことだけだった。さまざまなイメージが、アツと言う間に、私の頭のなかを通り過ぎて行った。私は、不公平で独善的な人間、うぬぼれが強い皮肉屋ではなかっただろうか？ 私は、目をとじざるをえなかった。この私に、一体何が期待できるというのか？ 私は、腕を広げて、前に倒れかかりそうになった。

三十六の直立した円柱が、六つは正面を向いて、十二は縦方向にならんで、すべて無傷のまま、広々としたホールを形作っている。アーキトレーブ⁵⁾も破風も、その形は損なわれていない。素材である褐色がかかった石灰石だけが、少し風化していた。せまい割れ目や穴には、ハヤブサが巢

くい、鳴きながらあたりを飛びまわっている。

この神殿を、パエストゥム⁶⁾のそれと比較してみると、各部分をよりバランスよく配置するある種の英知の点で、また、たとえば、長年の経験にもとづく行為の確固とした決然性や、夏の成熟、夜のやすらぎの点で、後者が勝っているといえるかも知れない。パエストゥムの神殿に近寄る者は、畏敬の念を抱かざるをえない。神殿はすべてを放出しているわけではなく、抑制し、また、人の心を完全に占有することはないので、人は、落ち着いてそれを観察することができる。歴史として、パエストゥムの風土の上を流れた数千年の歳月が、その重みをあとに残しており、そのために、神殿は、ほとんど非人間的なものとなつた。しかし、セジェスタの神殿は、最初の出会ひの驚くべき喜びが鎮静するやいなや、人間的な姿をあらわし、愛を喚起することで、人を完全に受け容れてくれる。

この神殿は、もとのままの姿で、今も立っている。工事は完成されなかった。暗闇のなかに神像が安置されるはずのケラ⁷⁾、いわゆる内陣が欠けている。円柱には、溝が彫り付けられていない。建物がのっている地面のゆるやかな起伏は一度もならされたことがない。神殿の階段は、深く掘り下げられ、円柱は、たけの高いアザミの群落と同じ高さに立っている。アザミは、無気力な夏の大地から、あたりに認められる唯一の色、燃えるような紫色をもぎ取っている。

立っているものは、完全である。当初の計画は異なっていて、建物が別のもとなりえたことを想起させるものは何一つない。人の歩幅に合っていない階段で――これは途方もない考えであるが――最終的に確実な形姿への上昇がはじめられる。この簡素な階段は、もともと巨大なものである。それは、地形とたわむれることなく、ローマのスペイン階段⁸⁾のように、踊りはねながら地形を乗り越えていく。ここでは、階段は、それを支える大地と対立しており、素材の最初の秩序、偶然の拒絶、カオスにたいして加えられた力の最初の集合を意味している。これにより、円柱は、その荘重な秩序を成就する場を見出しているのである。

私は、内陣に歩み入った。それは、外部と同じ大地だった。たけの低い香料植物や草のカーペットが敷きつめられていた。だが、何という変容！ 空間が、突然形を取っているのだ。壁も、屋根もなしで。アーキトレープの縁として円柱の上にかかり、破風としてその正面を上昇する、中断されることのない輪郭が縁取っているにすぎない。その輪郭は、息苦しいほどの容易さで、無形のガラスを形に切りわけるダイヤモンドのわずかな力で、外部の風景と虚空の上に引かれている。

いたる所で外界の大胆な立ち入りを認めている（外界がそこからあふれ出ることはありえない）空間内部では、外

界のすべての事物が、平板で具象的なものと化している。丘の背、密集した山なみ、はてしない地平線は、円柱の列でせきとめられる。人がうっとりした視線を投げかけるこの水平線と垂直線の力によって、大気は形姿を獲得しているのだ。円柱が、外壁の形をなさない支承で重みをうまく分散させているので、抗しがたい壁の厚みを苦もなく押し退けて、ゆとりとしての内部空間がなおも残存しているのである。

秩序の希求、無限にたいする不安が、この空間を築いた者の心にかつて存在したのかも知れない。おそらく、無限のときがもつ破壊的な力に直面して、他ならぬプロメテウス⁹⁾の子孫である人間は、わが身を守るために、有限の建造物で自己と外界を境界付けたのだらう。人間は、たぶん、自分の四肢の活力の許すかぎり、この無形の荒野に足を伸ばし、むやみに広い空に向かって両腕を伸ばして、その尺度を、割れ石の偶然の産物である素材に転用したのであろう。彼は、数えるのではなく、測ったのだ。神殿の有様は、幾何学的に規定されており、きっちりした数字ではとらえられない。線分は、黄金分割の比率で区分された。この神殿では、それがつねに適用されて、細部にいたるまでの位置が定められている。この比率で個々の円柱が配列されているので、それら相互の間隔はおのおの異なったものとなり、辺の長さも一様ではなく、その相違の異様さは、この建造物が自己の生の過剰を抑制し切れないうるかのような印象を生じさせる。この黄金分割の比率にしたがって区分された線分の長さが、神殿の外観を決定付けているのである。こうしてできた空間の限界内で、数字では決してあらかずことのできない無限のものがとらえられ、呪縛されてまどろんでいる。どの数値も、より高い値を求めている。だが、建てられた塔は、この無限のものにとっては、いわば緊急通路、無益な追求のころもに他ならない。それらは、自分自身に向かって跳ねかえり、その無力さを増加させるばかりである。無限のものは、数えられるや否や、大聖堂の尖塔の頂きを越えて逃げ去る。あとに残るのは、数えられぬものの端数、より大きく、高くとらえることも可能な継ぎはぎ細工だけだ。だが、プラタナスがその影を投げかける、四頭立て二輪戦車ほどの幅もないこの神殿は、生き物が生命力をもつように、無限のものを内包している。この無限のものは、直接目にはみえないが、いたる所でその作用をあらわし、その存在をわれわれに知覚させる。

私は、細道をたどり、円錐形の山頂にはいあがった。そこには、かつて、セジェスタの町がそびえ立っていたのだ。地面は、不格好な破片でおおわれていた。その形姿が精神

に解釈を迫るようなものは、もはや何一つ地面には立って
いなかった。山の形は、頭を膝のあいだに埋めた巨人の痛々
しく曲がった背中のようにのっぺりしていた。わずかに生
えた草も、焼けつくような夏の日ざしに、すっかりひから
びてしまっていた。刺のあるアザミだけが、花冠を空に向
かって振りかざし、暑さに耐えているのだった。

細道は、ときおり湾曲して荒地のなかに消え失せてい
た。私は、おおよそ上の方に向かって自分で道を切りひら
き、トカゲや弱々しい音をたてるヘビを脅かして追い立て
た。彼らは、不意にわき出したり枯れたりする小川のように
石のあいだに見え隠れしていた。さらにのぼると、ふた
たび小道の痕跡がみつかった。痕跡は、雨季にその上を水
が流れくだる色あせた石で見分けることができた。しかし、
この目印もときには当てにならないことがあった。水に洗
われた小石の痕跡は、通行不能の絶壁に消えていた。どこ
が道でどこが川床か、もはや確信をもって断言できなかった。
より上に達するために、私は、あちこちさまよい、おそ
らく数千年間誰も踏んだことがない土にふれたりした。
私が踏み出した歩みはどれも、目にみえない道の一部をな
し、それがもともと存在しなかったように、痕跡をとどめ
なかった。私がゆっくり作り出したこの道には、帰路とい
うものはありえなかった。振り返ってみて、私は、そこに、
眼前にあると同様の荒地が広がっているのを認めた。
私が今立っている足下には、確かに、割れて細かくわかれ
た不可思議な石があった。角ばった石や丸い石、スベスベ
した石やザラザラした石、それらにはおそらく、ずっと以
前に一度、人間の手がふれたに違いない。だが、その痕跡
はどこにもなかった。これらの石は、かつては壁を形作り、
敷石や敷居として役立ち、無数の靴底の接触によって平ら
にされたのだろうか？ 今、謎を秘めたそれらの石は、無
意味に混ざり合って横たわっている。あるものは強い日ざ
しに色あせ、またあるものは光彩を放っている。ひびの入
ったものもあれば、枯死した草の根にしぶとくからみつかれ
ているものもある。横たわっている石の下面には、なま温
かい湿り気が保持されており、日にさらされている面は、
直射日光を浴びて、縁の方からちぢんでいた。それは、地
中に急いで姿を消す生き物の影の集まりに似ていた。

私は、山のまわりを大きな弧を描くようにして登って
いった。神殿は、かなりの間、私の視野から身を隠してい
た。しかし今、私が、突き出た額のように海に向かって張
り出した頂きにたどり着く直前に、神殿は、またしても突
然、私の視野に入ってきた。背後では、もろくて裂け目だ
らけの壁がぐずれて崖になっており、下には、私が遠くか
ら手を目の前にかざして垣間みることのできた、ゆるやか
に反った大地がみられた。神殿は、今や内部の広がりを一
杯にみたしていた。太陽が、その燃えるような矢の束を私

に放っていたが、私は、何か確固たるもの、涼やかなもの
を感じ取っていた。貝肉のなかに真珠があるように、神殿
は、下の方に横たわっていた。

周囲には、冗長に、投げやりな感じで、山塊がまどろむ
ように横たわっていた。あらわな山腹が、ふるえる光の下
でぼんやり、昏睡状態で長々と横たわっていた。山腹が透
明な空に接し、澄みきった遠くの海が視界に飛び込んで
くる所にだけ、形の萌芽が目覚めていた。丘や入江の目にみ
えない輪郭が、上がったたり下がったりしながら空とたわむ
れ、ゆるんだものから確固たるものをはっきり分離してい
るのだった。しかし、よく似たもの同士が、なおも救いが
たく同居していた。風景は素材以外の何物でもなく、とき
には、それらが秩序の可能性のまぎわに歩み寄ることも
あった。風景に秩序がもたらされるのは、幸運な偶然だ
った。偶然が、動きに協和音をもたらし、この地を取り巻く
山々のふるえる花冠を投げおろして、そこに神殿の秩序が
異論の余地なく明確に生じていた。

牧神のときが流れていた。目にみえる世界では、何も起
こっていなかった。イナゴが根気よく立てる明るい持続的
な音は、すでに静けさの構成要素と化していた。神殿の上
を舞う鷹は、降下して、小さな巣穴に姿を消した。その穴は、
雨水が神殿の石灰岩を侵食してその形のもつ力を損なうこ
となくあけたものであった。円柱の列は、無傷で、その宿
命に立ち向かっていた。神的な明るい光を二度放つ、三角
の鬚付きの破風の輪郭は、大気から不壊の屋根を形作って
いた。円柱はそれぞれ、光に照らされて、次の円柱の影の
縞のうしろに隠れ、円柱の二つの列は、光に浸された隅柱
のところで交叉し合っていた。

私は突然、ずっと以前のことを思い出した。混乱と意気
消沈の状態に置かれていた私にとって、それはつねに正しい
こと、明瞭なことを意味していた。そのことを思うだけで、
私の気持ちは楽になり、高められた。たとえば、それは
ひとつの古い大きな机で、かつてフィレンツェで、私が
夏のあいだ住んでいた広い部屋に置かれていたものであ
った。部屋の床には、冷たい赤のタイルが敷きつめられて
いた。閉じられたシャッターを通して、弱い光が部屋のな
かに差し込んでいた。朝のうち町をさまよい歩いていた私は、
午後になると、暑いあいだは、プラトンの作品を熟読する
のが常だった。その都度読んでいた本をのぞいて、他の本
はすべて、荷物のなかにしまっていた。油を塗った木目
のあらい古びた机の甲板の上に、本は、読みさしのページ
が開かれたまま、置かれていた。わらに包まれたぶどう酒
の瓶、トマト、いちじく、桃などの果物、ナイフ、パイプ、
煙草でくもった水差しといった何でもないものが、その本
を取り巻いていた。ある日、『パイドン』¹⁰⁾ を読んでいた
とき、私は、奇妙な感情にとらわれた。今まで一度も経験

したことの無いような軽やかさで、私の精神は、思考の展開にしたがっていた。私は、プラトンがああ難解であまいまな言葉を出した個所に行きあたったのだ。その言葉で、彼は、超感性的なものを、たとえそれが不可解であっても、ともかく把握し、客体化したのである。そのとき、私の視線は、まったく偶然にも、本の行間をはなれて、果実のおだやかな赤さに吸い寄せられていた。

そうしたものを、私は、買ったり使ったりするたびに、配列を気にすることもなく、机の甲板にならべていたのだ。しかし今、この恩寵のときの影響で突然その意味が知覚可能になったあの言葉の魔術に喚起されて、私は、自分がせいぜいそれらのもつ具象性のために愛し、そこに置いておいたこれらの事物のなかに、いつもとは何か違うものを見出さねばならなかった。私は、それらの配列に、突然、ある特別な秩序の法則を認めたのだ。それは、規則性とは違って、果実や事物は、みかけは無造作に、あちこちに散らばっていた。とはいえ、それらのものの位置関係を、私はもう決して忘れることはないだろう。それは、美そのものであった。突然、現象は、その目的や意味からすると重要性をうしない、その実質と魅力をうばい取られた。だが、それらは、私の精神がそのなかに見出したあの揺るぎない秩序のおかげで、色や形として、無限の、不可思議な存在と化したのだ。

見事な石で築かれたこの神殿の秩序をみたとき、私はそのことを思い出した。その思いは、緑なす花輪のように過去と現在を結びつけた。もちろん、私は、まぶしい白や深紅、深い青が、かつてはその下部を装飾したはずだということを知っていた。金色に輝く屋根が計画されていた。彫像が、コーニス¹¹⁾や破風を一杯にすることになっていた。しかし、私には、そのしるしがこんなに雄弁に私に語りかけてくるのは、すべての装飾に形が欠けているせいであるように思われた。

この建物が神の住まいと考えられていたことを、私は知っていた。だが、すべてが一掃され、神々は没落したのだ。神殿がはたすことになっていた使命は、それを考え出した人間とともに朽ちはてた。だが、この秩序は、あらゆる荒廃に耐え、カオスに打ち勝って、今もなお生き続けた。それ自身の内部から生じた法則のなかに、美が、永遠の現在が、不朽が、不変が、無の見事な克服がやすらっていた。

私が今立っているこのはげ山に、いつの頃にか人が住んでいたことなど、一体何の意味があるのだろうか？ 私は、かつてセジェスタのはかない運命を決定付けた方向に目を向けてみた。東には、ギリシアが横たわっていた。南方、ちっばけな土色の雲にその頂きをかざられた聖なる山エリュクス¹²⁾の背後には、カルタゴがあった。そして、北西、豊

かな湾の背後には、ローマがひかえていた。

セジェスタは、古代に移住したトロヤ人たちの建設にならざると思われていたが、それが誤りであることは、最近の研究で明らかになっている。しかし、このセジェスタに絶え間ない不幸が降りかかったのには、十分な理由があった。近隣の諸都市に植民したギリシア人たちが、彼らがかつて灰にしたトロヤの人々にふたたび戦いを挑んだのだ。苦境に立たされたセジェスタは、シチリアの植民都市の力をくじくことをもくろんでいたアテネと同盟を結ぶにいたった。だが、アテネ軍は、シラクサに大敗してしまった。アルキビアデス¹³⁾が姿をみせ、夏の日、彼の影を現実として認めた。武骨な英雄たちの多くは、時が立つにつれて忘れ去られていったが、美しい者、軽薄な者、野心家、高慢な者、賢者は、時の力に魔法をかけて、死ぬことなく、時代を急いで駆けぬけた。彼らこそ、この敗北の責任者だったのだが。美が、困窮と恥辱にたいして凱歌をあげた。勝者の前でエウリピデス¹⁴⁾の詩句を朗読することのできたアテネ人は、その技のおかげで、奴隷の境遇をまぬがれることができたと言われている。

町やあらゆる人間の痕跡がこの地域からどうしてこれほど完全に根絶させられたのか、私にはわからない。歴史が存在しなかったかのように、神殿は、今もなお立っている。ただ、風土が手を貸したことは確かだ。この土地は、人間の手の感触をふたたび忘却することができた。遺跡は跡形もなく破壊され、土地は、人間や動物の血を雨滴のように飲み込んだが、それで地形が変わることもなかった。この土地は、無数の種族の吐息を、ふたたび、タチジャコウソウの花から立ちのぼる香りよりも希薄な、熱い乾いた大気にかえたのである。どこにも汚れは認められなかった。これほど過去の汚れが払拭された神殿は他にない。

私は、さらに山の頂きを登りつめた。その前に立つとはじめてわかるのだが、上の方で、半円形に山の円頂に組み込まれる形で、セジェスタの古い劇場が、広い範囲を包み込んでいる。舞台の区画はまだ残っている。コロスの場所や、その上で劇が上演された広い板石は、まだ見分けがつく。海と空は、明らかに、演技空間に組み入れられている。ポセイドンが共演し、宿運を解明するために、ゼウスがその場に居合わせていたわけだ。

大理石の座席の列は、大きな弧を描いて次第に高まり、座席には、浅いくぼみが付けられていた。私は、最上列の座席のひとつに腰をおろした。観客席は、日陰になっていた。太陽は、舞台だけを照らしており、その上では、一匹の黒い雄山羊が動きまわっていた。一匹だけ迷い込んだとみえて、群れのようなものはどこにも見えなかった。山羊は、俳優のように横から入ってきて、舞台の真ん中に立ちどまると、角を生やした頭を、上との接触を求めるとのよ

うに、高々とそらせた。

あらん限りの力で、熱心にしるしを乞い求めるように、山羊は、後脚で立ち上がると、そのまま歩き、それから、前脚を切り石の上ののせて、首を引きしぼった弓の弦のようにそらせ、背中 of 毛皮に隠れるくらい角をうしろにそらせて、身をふるわせながら待っていた。銀色に輝く光が、この山羊を照らしていた。首は、この光に照らされて、白くほっそりとしてみえた。山羊の頭に、何か人間らしい特徴が付与されたように思われた。それは明らかに私の方に向けられていた。口は苦痛にゆがみ、眼窩はうつろであった。

きらきらした光が、直立してふるえている山羊の体をおおった。山羊は、ふたたび軽やかに悠然と、黒い毛をなおも脚下に垂らしながら歩き出した。まもなく、それもまた光をうばわれて、影のように色あせた。静かにたたずむむき出しの体は高められ、充実した四肢によって、力と無限の可能性が約束されていた。皮の下には、そこに押し込められた人間が今にも日の光の下に飛び出してくるような動きが認められた。あいかかわらず上を向いた顔は苦痛にゆがみ、あこがれの荒々しい絶望的なしづきが平然たる空に向けられ、この前面の祭壇を越えた青い大気の後背に、鈍く白い光が生じるまで、嘆願と訴えがくりかえされた。縁のぼやけた小さな雲が、あたかも自力でそうするように、上下動していた。

その姿は、ゆっくりと腕をあげ、あるときには力強く、荒々しく、またあるときには優しく、やわらかく、動きが絶え間なくその体を変化させていった。その外見は、男性であるのか、女性であるのか、ほとんど見分けがつかなくなった。そして、あげられた腕が形のないもやをつかみ、それをまるめた。そのあいだに外貌ははっきりした表情を獲得し、眼の輝きは強まり、ほほえむ口は閉じられていた。しなやかに手を動かし、軽く押しつけるようにしていたが、それをやめて、ふたたび、もやが完全な金色の球になってまわりはじめるまで、そのもやをまるめていた。

球は飛びはじめ、海と大地が、それをやりとりした。球は、湾の青いたてがみを走りぬけると、山々の頂きを難なく飛び越え、虚空に飛びあがり、創造者の腕でくりかえし握られて、高々と舞いあがり、そこから逃げ去った。

その姿は、ふたたび、腕を下ろしてじっとたたずんだ。半陰陽の体が、次第に淡くなってほんやりした小さな雲の形で額の上方に浮かんでいる、金色の球を見上げていた。腕がもう一度それをつかんだが、今度はまるめなかった。腕は、明るさのなかで会おうやいなや、敵対するようにぶつかり合い、争い出し、引っ張り合い、引き裂き合った……。体全体が、はげしく揺り動かされていた。脚が意味もなく互いに飛びあがり、交叉し合い、新しい姿、一瞬たりとも存在しえない、自然の理にそむくものの恐ろしいカリカ

チュアを生み出した。それらが消え去る前にした唯一の行為は、破壊であった……。苦しげに顔をゆがめ、細切れにされた体から引き離されて、無力な頭が、虚空に大きく口を開けながら、芝草の上に浮かんでいた。他のすべてのものが形をなさずに消え去ったのに、その表情は凝固していた。そして、その頭はゆっくり回転しはじめると、ほんやりと風の方向をみつめた。それはもはや、死者の仮面以上のものではなく、その眼や口の切れ込みを通して、空の青さが押し入ってきた。だがそのとき、大気に加減で偶然に、雲が、真ん中で切れはじめた。雲は、木の葉のように小刻みにふるえ、ゆるやかに舞いおりて、蔓のように伸び、花冠のように頭に巻きついて、それをおおい隠したのだった。

底本として、下記のものを用いた。

Winkler, Eugen Gottlob: Dichtungen, Gestalten und Probleme. Nachlaß. In Verbindung mit Hermann Rinnund Johannes Heitzmann, hrsg. von Walter Warnach. Pfullingen 1956.

なお、下記の新書版も適宜参照した。

Winkler, Eugen Gottlob: Die Erkundung der Linie. Erzählung Aufsatz Gedicht. Reclam-Bibliothek Band 1472. Leipzig 1993.

訳註

1) アルカモ (Alcamo)

シチリア島西部の都市。地名はアラブ人が9世紀に築いた要塞の名に由来する。13世紀にフリードリヒ2世が山裾に新しい町を建設し、アラブ人と入植したキリスト教徒を共存させ、文化の交流に尽くした。

2) セジェスタ (Segesta)

シチリア島のセジェスタの町の郊外、バルバロ山の頂上から麓にかけて存在する古代ギリシアの遺跡。山腹の丘の上に、紀元前5世紀のドーリア式神殿が復元され、山頂には劇場などの古代都市遺跡がある。

3) カステランマレ湾 (Castellammare)

シチリア島北部、ティレニア海の湾。円筒形の塔をもつ城塞(カステロ)が海(マール)に突き出ているところから、この名がつけられたと思われる。セジェスタの遺跡から、この城塞がのぞまれる。

4) ドリュアス (Dryas)

ギリシア神話に登場する、木の精霊であるニンフ。

5) アーキトレーブ (architrave)

ギリシア・ローマ時代の建築で、柱とフリーズの間に水平に架した梁材のこと。柱と柱の間をつなぎ、

屋根を支えるなど、建築物の上層部を構成する重要な部分である。

- 6) バエストゥム (Paestum)
イタリア南部、カンパニア州にある古代ギリシア・ローマ時代の都市遺跡。紀元前7世紀にギリシアの植民都市として建設され、ヘラ神殿、ポセイドン神殿、ケレス神殿のほか、城壁や城門、円形闘技場の遺跡がある。
- 7) ケラ (cella)
ギリシア・ローマ神殿において、周囲の列柱廊部分から壁によって区別された、神殿の本体を指す用語。内陣、つまり神像を安置する神殿の居室であるギリシア語のナオス naos と同義に使われる。
- 8) スペイン階段 (Scalinata di Trinità dei Monti)
ローマの中心部にあるスペイン広場の北側、丘へ上る137段の屋外劇場風の階段。1723～26年に、F. サンクティスによって建造された。
- 9) プロメテウス (Prometheús)
ギリシア神話に登場する神で、ゼウスの反対を押し切り、天界の火を盗んで人類に与えた存在として知られる。また人間を創造したとも言われる。
- 10) 『パイドン』 (Phaidon)
プラトンの著書は対話の形式で書かれており、『パイドン』は、ソクラテスが刑死の直前に仲間と交わした討論ということになっていて、プラトン哲学の中心にあるアイデア論をまとめたかたちで展開した著作である。パイドンは討論者の一人の名。
- 11) コーニス (cornice)
壁面を保護し、装飾の役割をも果たすため、軒先に突出した帯状の水平部分。軒蛇腹。
- 12) エリュクス (Eryx)
起伏の少ない平原に立つ完全な独立峰であるため、実際の標高より高く見え、実際の高さは665メートルに過ぎないものの、古代にはエトナ火山に次いで、シチリアで2番目に高い山とみなされていた。
- 13) アルキビアデス (Alkibiades) (前450頃～前404)
アテネの政治家、将軍。ソクラテスとも親交があった。アテネは彼の積極拡大政策をいれて、前415年にシチリア遠征を敢行したが、2年後に遠征軍は壊滅した。
- 14) エウリピデス (Euripides) (前485頃～前406)
ギリシアの三大悲劇詩人の一人。ソフィストと自然哲学の影響を受け、神々に対しては常に批判的立場を通すと同時に、作品には情熱的で甘美な台詞や場面が多い。また劇の最終的な山場で神が登場して解決をもたらすいわゆるデウス・エクス・マキナの手

法を多用したのも特徴。

解説

オイゲン・ゴットロープ・ヴィンクラーは、1912年5月1日にチューリヒで生まれた。青春期をシュトゥットガルト近傍のヴァンゲンで過ごした彼は、ラテンの明晰さに憧れて、ミュンヘン大学でロマンス文学を専攻し、カール・フォスラーの門に入った。

ヴィンクラーの短い生涯における最初の危機は、この大学生時代に訪れた。1932年春にパリからミュンヘンに戻った彼は、数々の経験を積み、希望に燃えていた。このフランスの首都での数カ月にわたる滞在中、彼は、学位論文『現代のフランスの舞台における古典作品の上演』の資料を収集した。さらに彼は、様々な感銘を受ける機会に恵まれた。とりわけ、ポール・ヴァレリーの作品との出会いは、彼に多大な影響を与えた。ヴィンクラーは、このフランス人の文学に、精神の揺るぎない明晰さ、深い精神性に裏打ちされた純粋な形式を求める強い意志を認めたのであった。ヴァレリーの作品に、彼はロマンス精神の最も美しい発露を見出したわけだが、同時に、自分にとってフランスがすべてではないということにも思い至った。

しかし、彼の経済状態はその後急速に悪化し、ヴィンクラーは自己の勉学に終止符を打つ必要に迫られた。1933年5月に、彼は口述試験に臨み、学位を取得したが、そのことで何の満足感も充実感も味わうことができなかった。それゆえ、1933年の6月から7月にかけて学位論文の印刷費を使ってなされた彼のイタリア旅行は、あたかも、自分が克服できない現実からの逃避行の様相を呈していた。

ヴィンクラーは激しい衝動に突き動かされるようにイタリアに向かい、ローマからシチリアにまで足を伸ばしたが、この旅行は、自己の内心の葛藤を解消し芸術と人生の揺るぎない規範を求めるための旅でもあった。

とくにセジェスタの神殿の光景は、その前後の彼の旅行のすべての体験をはるかに凌駕するものだった。

ヴィンクラーの精神は高揚し、その創作意欲は最高潮に達する。自己の芸術志向とその断念の苦悩に満ちた思い出が共鳴し合い、彼は、シチリアの炎熱の中で、安らかに、この上なく幸福に、自分の短い人生で最も恵まれた時を体験することになる。旅の慌ただしさの中で書かれた彼の手紙は、こうした経緯についてほとんど触れていない。2年後、エッセイ風の自伝的短編『トリナクリアの回想』においてはじめて、この体験の文学的な造形化がなされたといえよう。

古代の世界、古代の精神と形式を理解しようとするヴィンクラーの努力は、彼自身の芸術志向、理想的な文学表現

を求める彼の苦闘と緊密に結び付いていた。彼は、理想的な文学表現と自己の叙述能力の相克に苦しみながら、文学行為が明確な意識に裏付けられているときにのみ自己の志向と合致した作品が生まれるという信念を次第に強めていくことになる。その意味で、彼のシチリア体験は、その後の彼の創作活動に計り知れない影響を及ぼしたといえよう。

セジェスタでは、偶発的なものがすべて締め出されている。どんな細部も、明敏な醒めた意識の表現をなしている。大地や風景のカオスの上に、神殿という形をとって、素材の秩序が聳え立ち、個々の円柱にその「おごそかな成就」を刻印しているのである。円柱を取り巻く大気や、円柱を通して垣間見える風景すら、造形され、確固たる秩序の領域に移されているように見える。

神殿の内部にも外部にも空間は存在しているが、外部では形をもたない空間が内部では形をもつ。この造形られた空間に比べると、外界の事物は、すべて平板なものに見える。この逆説は、セジェスタの神殿における空間の「現実」を明らかにしている。

ここで示されているのは、理念と現象の関係なのである。神殿という形で造形化された空間の理念は、風景の中で、その見かけよりもはるかに大きな「現実」を内包している。この理念は、神殿という芸術作品で形式を獲得することによって、感覚的で具体的な存在になる。形式の基本条件である尺度が、空間の理念、無限そのものを制約していく。

しかし、ヴィンクラーにとって重要だったのは、素材の克服や生命のない物質にたいする精神の勝利を示すことだけではなかった。建造物は、彼にとって、壮大な人間的行為の所産でもあった。

建造物に内在する秩序への希求を、ヴィンクラーは、無限にたいする不安のあらわれと捉えている。神殿を成立させた創造力の基礎をなすのは、喜びや信仰ではなく、外界に身を委ね、脅かされている人間の孤独、無力感ということになる。古代の形式を、脅かされた個の反抗、造形という形をとった克服のポーズと捉えるヴィンクラーの解釈からは、確固たる形式を志向する現代人の存在論的な苦悩が読み取れるように思われる。

「秩序」という言葉は、幾何学的な規則性や目的の定まった配列ではなく、精神的に高められた生き生きした存在のあらわれを意味しているのである。セジェスタでの体験を再現する際にヴィンクラーにとって重要であったのは、神殿を築き上げた古代の人々の創造性に感情移入することではなく、むしろ、精神が物質の世界に持ち込んだ秩序の探求だった。彼は、生き生きした秩序が人間と事物の関係を規定し、事物により高次の意味を付与すると考える。こうした秩序は、生がその豊饒さを示す時にはなく、その自然のリズムを中断する時、突然立ちあらわれてくる。精

神はその秩序を目に見えるものにするために必要なのである。精神が美を事物の中に認めるやいなや、美は、神殿と風景の網目の中にその姿をあらわす。

歴史は確かにセジェスタの町を没落へと導いた。しかし、空間を形造ることでその空間の無限性に打ち勝ったように、神殿は、時間の無限性をも克服している。人間の精神の所産として、神殿は時間を自らの秩序の中に取り込んでいるのである。空間と時間という二重のカオスの内部における秩序のファクターである神殿は、空間の根底にあってその本質に相応した秩序を形造り、しかも芸術として時間のはかなさに打ち勝つ。

シチリアの風景の、焼けつくような陽光に満たされた牧神の時の静寂の中で、古代の造形の記念碑を目前にしたヴィンクラーには、陽光と精神、精神と秩序が、互いに関連し合い、規定し合い、支え合う要素、美の基盤として立ちあらわれてくる。

ヴィンクラーと古代との出会いは、詩人、芸術家としての自己確認の体験を必然的に伴っていた。彼のまなざしには、いわゆるドイツ人の古代追従の影は認められない。問題なのは、古代のアポロ的あるいはディオニュソス的な解釈ではなくて、古代の人々が自己の生や思考、造形の基礎にしていた「方法の考察」である、と彼は考えている。

ヴィンクラーの文学的志向には、多様な現象の中に形式の法則を見出そうとする分析的な視線が多分に感じ取れる。この『トリナクリアの回想』ばかりでなく、他の小説も、程度の差こそあれ、現実的なものの無限の充満の中に自己の志向と合致したものを認めようとする精神の孤独な冒険を描いている。だが、彼は、こうした精神的な体験を実生活に即して描き出そうとはしない。むしろ彼は、見られたものや認識されたものが純化された形であられる回想の形式を選ぶ。ただ、分析によって見出された秩序の構造を文学的な手法で、明確に、具体的に描き出すことは、彼にとって容易なことではなかったようだ。

リルケやホフマンスタール同様、ヴィンクラーもまた、精神の感覚化ばかりでなく、感覚を精神化し、距離を置いて事物をじっくり観察することで、最も目立たないものを秩序の次元にまで引き上げることに並み外れた才能を示したといえよう。

この小説は、エッセイの形をとった自伝的散文であって、そこでヴィンクラーは、造形化された世界の一端を読者に垣間見せるのではなく、認識を目指す彼の精神の本質を示そうとしているように思われる。こうした認識は、普遍的、客観的な真理の認識ではなく、世界と批判的に対決しようとする自己の認識なのである。まさにこのことを、ヴィンクラーはシチリアの神殿を眼前にして体験したのだった。

〔本解説は、日本独文学会中国四国支部編『ドイツ文学論集』第24号（1991）に掲載された拙稿「物語作家としての

オイゲン・ゴットロープ・ヴィンクラー」をもとに加筆修正したものである。〕